

「変える勇気」が豊かな秋をもたらす

野村 浩子

1986年の男女雇用機会均等法の施行から30余年、均等法世代の女性が50代半ばを迎えて、定年が視野に入る女性が増えてきた。

50代から60代は、キャリアを四季に例えるなら「秋」にあたる。社会人となり基礎固めをする「春」、職場の最前線で成果を上げる「夏」、そして「秋」となると後輩に活躍のメインステージを譲りサポートする時期に入る。

女性にとっては、キャリアの「秋」の迎え方が男性に比べると難しい。男性には昇進街道を走る人からスーダラ会社員まで多様な先輩の後ろ姿が見えるが、「定年まで勤めあげた女性」はいまだ少ない。定年までの身の処し方がイメージできないのだ。

いま40代、50代の女性は、男性中心の組織で仕事を続けるために、犠牲にしてきたものも多かった。結婚出産を諦めた人もいれば、子育てとの両立で葛藤を抱えた人もいる。そうした人は「そろそろ後輩に席を譲ってください」と言われても、すんなり受け入れられないことも少なくない。「これまでいろんなものを犠牲にして頑張ってきたのに」と思ってしまうのだ。

非正規で働く人は、老後資金の不安もある。個人で老後資金2,000万円は必要との報道が注目を集めた。60歳で引退して30年ほど単身で過ごすなら、筆者試算でも必要な老後資金はほぼ同額である。もし不安なら60歳を過ぎても細く長く働くプランを描きたい。

さて定年が視野に入った頃から、どんな心得が必要なのだろう。筆者が先輩にヒヤリング調査したところ、「本当に何をやりたいのか『心の声』に耳を澄ますこと」「変える勇気、捨てる勇気をもつこと」という声が聞かれた。これまでの人生の延長線上で考えると、どうしても過去の成功体験に縛られてしまう。新しいものを手にするには、何かを手放すしかない。変える勇気をもった先輩たちの顔は実に晴れやかだった。



PROFILE

のむらひろこ：1962年生まれ。ジャーナリスト・東京家政学院大学特別招聘教授。84年お茶の水女子大学文教育学部卒。日経ホーム出版社(現日経 BP)発行の日経 WOMAN 編集長、日本経済新聞社・編集委員を務めたのち、2014年4月～20年3月淑徳大学教授。19年9月東京都立大学法人監事。20年4月から現職。著書に『定年が見えてきた女性たちへ』(WAVE 出版、2014)、『女性リーダーが生まれるとき』(光文社新書、2020)など。